クール」（ヤマハミュージックメディア）です。

下の絵を見て下さい。動物がたくさん描かれていて、「さぁどんな音が聞こえるかな?」と生徒に問いかけるページがあります。生徒たちは「かえるがポチャン、車がブッブー、きつつきがコンコン…」などと答えるでしょう。この絵からまず音のイマジネーションを持たせるという発想です。これは非常に重要なことです。子どもは、まず自らの生活体験の中で様々な音を体験し、そこから感性を膨らませて学んでいくからです。

また、ハンガリーやロシア生まれの教本となると、国の教育体制にピアノ教育が盛り込まれていたというその歴史的政治的背景から、教本は他国のそれと全く違った様相を呈しています。特徴的なのは、ソルフェージュや聴奏法で耳を育てることを重視している点です。自国の童歌など、その国の子どもたちには耳なじんだ曲も多用されています。ソビエト時代の**「幼児のためのピアノ教本」（全音）**、ハンガリーの**「ピアノの学校～コダーイ・こどもの音楽教育」（音友）**が一例です。

スオミ・ピアノ・スクール（ヤマハミュージックメディア）P13より

日本では、ピアノ教育の発展とともに作曲家、ピアニスト、音楽教育者たちが執筆に携わり、非常に多様な教本が出版されてきました。海外の指導法から学びその良さを取り入れてつくられたメソード（**ピアノはうたう／加勢るり子著**など）、作曲家が自らの音の世界をピアノ教育に反映し、その理想を限りなく追求したメソード（**Miyoshi ピアノ・メソード／三善晃：著、こどもの宇宙／湯山昭：著**など）、楽器メーカーが自社の音楽教室向けに編纂したメソード（**みんなのオルガン・ピアノの本**）、などピアノ教育への考え方を反映した多種多様な教本が生み出されています。

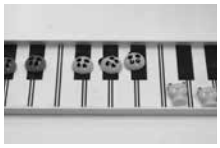
教本の併用でそれぞれの良さが引き立つ

現在、多数のピアノ教本が市場に出回っていますよね。それらの教本を見ていると、人間の能力を最大限に発揮した教本が出尽くしているという印象を持ちます。教本それぞれには、個性、つまり特色がありますが、教本それ自体で完璧なピアノ教育が成り立つわけではありません。教本は使われ方次第でその可能性が広がるのです。私はピアノ指導に対する色々な考え方を組み合わせることでより豊かなピアノ教育の可能性が広がる、つまり、様々な教本を併用しながら、お互いを活かす使い方をしていくのがよいと考えています。教本は、学習者たちに使われないと市場から姿を消してしまいます。教本と教本を併用することは、良い教本が残っていく、ということにもつながるのです。

例えば、アメリカ生まれの「バスティン・ピアノパーティー」（東音企画）で〝弾く楽しさ〟を、「Miyoshi ピアノ・メソード」で〝響きを聴く楽しさ〟を子どもたちに体験させながら、導入部分を楽しく学びレベルアップするのはいかがでしょうか。教本だけに頼りすぎるのではない、簡単な教具なども駆使してみましょう。手軽にできる簡単なものから始めていけばよいのです。

丸山先生の使用教具

音の階段：鍵盤を階段状にしたもの。音の高低を階段に見立てて、身体で覚える。階段を「上がる」と音が高くなり、階段を「下がる」と音は低くなる。


缶の鍵盤：缶のふたに鍵盤模様のシートをつけ、そこにマグネットをつけて音を覚える。

キリンの手袋人形：丸山先生のお手製。「葉っぱを食べるときはどうする？」。子どもたちはキリンの顔を上に持ち上げます。音の高低を学びます。

［特集２］

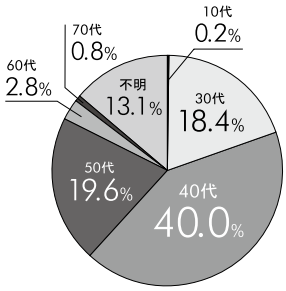
ピティナ・ピアノセミナー　レポート制度一周年

学び続ける指導者たち

ピティナ・ピアノセミナーのレポート制度が開始してから早１年。会員・非会員問わず、全国でのピティナ・ピアノセミナーにご参加いただいた方々に、当日の講座内容とご意見・ご感想をまとめて提出していただき、講師の先生が確認しサインをしたのち提出者の手元に戻る、“セミナーレポート”。
講師の先生とのコミュニケーションに、ご自身の頭の整理に、日々のレッスンに生かすノート代わりに、と大変活用していただいております。この１年間の総提出数は 8280 枚。提出者数は 2,527 名（会員・非会員問わず）。
提出状況のデータをご紹介しながら、“学び続けるピアノ指導者たち”の姿に迫ります。

提出者年齢層

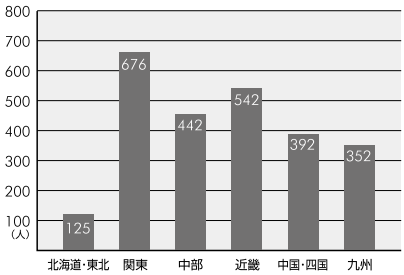
提出者の年齢層別の分布です。20歳代～70歳までと幅広い年代の指導者の方がご提出されています。やはり、30歳代～50歳代の先生方が全体の80％近くを占めてはおりますが、見過ごせないのが、60歳代～70歳代の先生方。ピアノ指導者には、定年退職はありません。いくつになっても学ぶということに対して積極的でいる姿は、正に若い世代の指導者の方々にとってはお手本ではないでしょうか。



エリア別提出者数

各エリア満遍なく提出者がいるということに注目です。「セミナーに参加したいけれど関東ばかり開催があって、私のエリアからは遠い…」と思っている方も多いのではないでしょうか。ですが、たくさんのエリアで幅広くの参加者がいることを見ても分かるように、各エリアで様々なセミナーを開催しております。

今後のセミナー開催予定はこちらの一覧からご覧下さい。エリア別検索も対応しております。



レポート総提出枚数

この一年間で提出されたセミナーレポートの総計は8280枚。その中で半数以上の方々が、複数回の提出をされています。

20回以上提出されている方も、全国で9名いらっしゃいました。

総提出枚数	8,280 枚
提出者数	2,527 名 （会員・非会員問わず）
20回以上提出者	9 名
最多提出回数	27 回

20回以上提出されている先生方のコメント

●セミナーレポート用紙には、講師の先生には申し訳ないですけれど、ノートの代わりに、講師の先生のお話を片っ端から書いていくの。そうすると後で読むだけで全部思い出せるでしょ。とっても便利な使い方ですよ。（佐野幸枝先生）

●セミナーで学んだことをレッスンで実践してみようとする気持ちから、生徒が来てくれることがより楽しみになりました。効果はすぐに現れなくても、気長に楽しく頑張っていきたいと思います。（栗原文惠先生）

●分析系のセミナーは積極的に受講していましたが、疑問に思っていたことが大きく解決でき、とても満足いたしました。レポートは時間内でまとめようとするとなかなか難しいですが、先生からのコメントがいただけるととても嬉しいですね。（松本峰子先生）

●講座を通じてお知り合いの先生ができたり、私にとってコミュニケーションの場でもあると感じています。講師の先生からはもちろん刺激をうけますが、熱心に講座を受けている他の先生方からも刺激を受けます。（石井晶子先生）

●レポートを書くために、もう一度セミナー内容をその場で復習することになり記憶がより鮮明になり、定着するようになりました。また、自分で考えてやってきたことを先生方もなさっているとお聴きすると、自信にも繋がります。（内海淳子先生）

●セミナー情報を常にチェックし、興味のある講座には可能な限り伺う日々を送っています。パスポートにシールが残ることで足跡を実感できる日々。実に多くの貴重な機会を与えていただき、感謝に耐えません。講座を聴いて涙を流したこともありました。（梅村崇子先生）

●確認ができているかどうか、勉強不足なところはどこかと、書くことによって自己分析をするようになれました。講師の先生から思ってもみなかったところへのコメントをいただいたり、質問への回答をいただき感激することもたくさんあります。より講師の方に近づけたように思えます。（原明美先生）

Interview

佐野幸枝先生インタビュー

高すぎる目標より毎日の積み重ねを大切に

現在27回という最多のセミナーレポート提出回数である、佐野幸枝先生。先月、教室50周年記念会を迎えられた先生に学ぶということ、継続することについて、お話を伺いました。

特別頑張るつもりでなく続いてきた50年

「50年っていうと、皆さん「とてもすごいこと」って仰ってくださいますけど、自分としては、特別に頑張るつもりもなくやっていたら50年経ってしまった、というのが本当のところですね。その人のその人らしさが出てくれば一番嬉しい、そのことを大切にして淡々とお稽古を続けてきました。昔はそれこそ「カラスが鳴かない日はあっても、幸枝先生が怒らない日はない」と言われるほど、過激なことをしていた頃もありましたけど、それではどうにもならない、ということがだんだん分かってきたのでしょうね。生徒さんがピアノをやめてしまったら、それこそ元も子もないでしょう。その子らしさが伸びるということを一番大切にしています。」

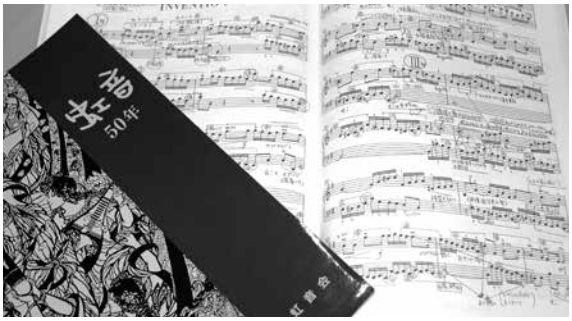
原動力は、「子どもが好き」な気持ちと「感動を求める」気持ち

「根本的に、子どもと一緒に何かする、というのが好きなのはあります。他には、ものすごく感動するものを聞くと背中がゾクゾクしたり、素敵なハーモニーを聞くと涙がこぼれてきてしまうことがあります。でもそういうことって自分にとって、「あぁ、私感動しているんだ」って感じられてすごくワクワクすることなのです。それがクセになって、またあの感じに出会いたいな、また感動したいな、って思って出かけていってしまうのです。」「お勉強もね、特別に頑張っているわけでなくて、淡々と続けているだけです。忘れてしまうことも多いから、忘れてもいいようにたくさん勉強の機会をつくっているだけ。セミナーレポート用紙には、講師の先生には申し訳ないですけれど、ノートの代わりに、講師の先生のお話を片っ端から書いていくの。そうすると後で読むだけで全部思い出せるでしょ。とっても便利な使い方ですよ。」

「継続」とはその日その日を大切に積み重ねること

「私階段を昇るときに上は見ないんです。だって見たらがっかりするでしょう。ひたすら足元だけ見て、一段一段昇っていって、そうするとそのうちに必ずてっぺんまで着くの。てっぺんまで行った時に後ろを振り返って見下ろして「おー結構昇ったな」って思えるのです。「あそこまで昇らなきゃ！」って無理な目標や高すぎる望みを持ったら、ゆとりがなくなってしまうでしょう。その日その日を大切に積み重ねていければ、ある日気がついたら、結構高いところまで昇ってきたな、と思える。続けていくってそういうことではないかしら。」

（文責：有門真希）



佐野先生の教室の50年の軌跡と、勉強会の集大成。的確に且つ丁寧に書かれた解説の数々は、この一冊で既に充実した教則本。